大都市近郊に立地する公共ホールの利用圏域とその形成要因

—N市文化会館の事例を通して—

FACTORS DETERMINING USER'S AREA OF THE PUBLIC PERFORMING ARTS CENTER
IN THE SUBURBS OF A LARGE CITY

—Case study in N-city performing arts center—

坂口大洋*, 小野田泰明**, 菅野 實***

Taiyo SAKAGUCHI, Yasuaki ONODA and Minoru KANNO

The objectives of this study are to find the characteristics of user's areas of a public performing arts center and predict the future trend in the suburbs of a large city. The questioning was conducted on below three points; the properties of people coming to the performing arts center, the time that takes to come there, tendency to use halls in the vicinity of the city. Based on the questionnaire we find the relation between the user's profile and the actual conditions of there use. As a result, 1) that are over 55 years old, and 70% of whole subjects drive to the hall. 2) It takes 30 to 40 minutes to come to the hall for 60% of whole subjects. 3) In the two most frequent users, housewives are likely to come to the halls in the center of a large city, contrary office worker have the various tendency on picking halls to go.

keywords audiences, public performing arts center, user's areas,
the suburbs of a large city, factors determining
鑑賞者, 公共ホール, 利用圏域, 大都市圏近郊, 形成要因

1. 研究の目的

近年、日本の劇場・ホール(以下ホール)の立地を取りまく状況は、劇的に変化している。第一は、施設整備数が飛躍的に増加したことである(注-1, 文-1)。この為、ホールの利用圏域は、従来以上に他のホールとの役割分担、ネットワークが求められるようになり、圏域の設定が難しくなっている。第二は、その立地が従来の大都市中心部から多様化してきたことである。その傾向は次の二つに集約出来る。一つは、ホールの機能が高度化、複合化したために必要な延床面積が増大し、中心部より郊外での立地が増加したこと。もう一つは、全国的な整備の進展により地方の小さな都市においてもホールが設けられるようになったことである(注-2)。第三には、前述の二点とも関連するが車社会の進展である。大都市近郊や地方都市では日常生活の移動手段として自動車が必要不可欠なものとなっており(注-3, 文-2)、利用圏域への影響を把握することが重要になっている。

他方、ホールの鑑賞者(注-4)に対する地域計画研究には幾つかの点でその進展を困難にする要因が存在している。第一には、演目や演者の内容によってその都度圏域が大きく変化するという、施設独自の要因である。その為、供給するサービスがある程度の階層構造を持っている他の公共施設(病院、福祉施設、図書館、学校)などに比べて利用圏域と施設の関係という点では、ホールの地域計画研究はいまひとつ

進展していなかった。第二は、調査実施上の問題である。公演時の鑑賞者調査のためにはホールのみならず催事プロモーター等多くの関係者との調整が必要なこと。調査の性質上、限定された短時間で多数の調査票の記入と回収をこなさなければならず、十分な回収率とデータの質が確保し難いことなどである。これらの課題を克服するためには、精緻な鑑賞者データを蓄積しつつ、与条件との関連を個々に読み解いていく努力が重要となる。

そこで本稿では、鑑賞行為をホール内だけで完結するものではなく利用者の生活環境と密接に関わりながら成立する行為であるという視点で、利用圏域と地域的なホールの立地の問題について考察を行う。そして、従来経験的に想定・計画されていたホールの利用圏域をより実態に基づいたものにするためのデータ提供を目的としている。

具体的には、特定の公共ホール(注-5)を対象としながらも、約半年間合計19演目について鑑賞者全員にアンケート調査を行い、鑑賞者の主体条件、催事内容、圏域の変化、主体条件とホールの利用傾向の関連について考察する。

また、個人レベルからみた鑑賞行為及びそのプロセスについては、ヒアリングをもとにより詳細な調査分析を行っているが、この内容は別稿として明らかにする予定である。

* 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻 助手・工修

** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻
助教授・博士(工学)

*** 東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻 教授・工博

Research Assoc., Department of Architecture and Building Science, Graduate School of Engineering, Tohoku University, M. Eng.
Assistant Prof., Department of Architecture and Building Science, Graduate School of Engineering, Tohoku University, Dr. Eng.
Prof., Department of Architecture and Building Science, Graduate School of Engineering, Tohoku University, Dr. Eng.

2. 既往研究との関連

地域施設の利用圏域については、岡田、柏原らによる圏域研究(文-3)をはじめとして、病院、図書館などのそれぞれの施設種において多くの優れた研究が展開されている。ホールについては、森田の研究(文-4,5)が先駆的である。森田は、大阪圏を中心に大都市中心部と郊外との圏域構造の違いや、演目により需要圏が異なること等を明らかにした。その後、小野田、菅野(文-6,7)が全国のホール整備とその使用状況を調査し、使用日数やジャンルとの関係を明らかにしたが、個々の圏域構成に関しては、研究すべき領域が残されていた。また、鑑賞行為に対する研究は、清水の研究(文-8)本杉らの研究(文-9)船越、浦部らの一連の研究(文-10,11)があるが、その多くは舞台芸術空間内の建築計画上の観点からのものである。

本稿では、森田の知見を比較対象としながら、約20年経た現在での郊外型ホールの圏域構造の形成要因を明らかにするものである。

3. 調査概要

3.1 調査対象施設と対象地域 (表-1, 図-1)

対象施設は、1997年に宮城県名取市に開館したN市文化会館(以下N会館)である(表-1)。選定の主な理由は、半年間にわたり全面的な協力を確約してくれたこと。自動車による来館を想定した立地であること。大都市近郊の衛星都市で特化した固有の文化的特徴が顕著でないこと。音楽主目的の大ホールと音楽専用の中ホールの両方(両ホールで調査が可能)をもつ複合施設である等の先述した近年のホール整備の主な特徴を備えていることである。

表-2、図-1に、N会館を中心に半径20km以内、その周辺の300席以上又は自主事業を実施しているホールと周辺自治体の居住人口を示す。これを見ると、20km圏内で約150万以上の人口があること。ホール整備は、仙台市中心部に集中していることがわかる。また、名取市では通勤・通学者の約50%が他の自治体で従事し、昼間人口の高い流動性を示している(注-6)。

3.2 調査・分析の方法 (表-3)

調査は、全有料自主事業19公演(表-3、注-7)の入場者(注-8、以下鑑賞者)全員に開演前に調査票を配付し、公演終了後その場で回収する方法をとった。調査項目は、主体条件、来館の手段・起点、所要時間、普段のホール利用頻度、ホールの評価等の計18項目(自由記述も含む)である。各公演の鑑賞者数、占席率(鑑賞者数/客席数)、有効回答数

(注-9)、有効回答率は表-3に示す。

分析は、各公演別の鑑賞者の概要を明らかにした後、居住地、移動手段等から公演毎の利用圏域の変化の要因を把握した。さらに、普段のホールの利用頻度が高い鑑賞者の利用傾向からその利用パターンを分類し、鑑賞主体と地域のホール整備状況との関連を明らかにした。

4. 各公演の鑑賞者の概要 (表-4 図-2)

表-4、図-2は、各公演における鑑賞者の構成を示したものである。

男女の構成は、全体で男性26%、女性74%であり、各年代を通じて大きく女性が上回っている。公演毎でもNo.14、No.15以外は女性の比率が70%±10%の範囲となっており、平成8年度の社会生活基本調査(注-10(以下社会調査(文-12)))における行動者率の全国値での鑑賞項目のそれぞれの女性比率(クラシック音楽(63.1%)、ポピュラー音楽(66.2%))

図-1 N会館周辺のホール整備状況

図-2 ジャンル毎の鑑賞者 - 年齢

表-1 調査対象施設概要

敷地面積	27,548 m ² ・建築面積
5,831 m ² ・延床面積	13,652.9 m ²
大ホール (音楽・演劇主目的の多機能ホール)	1,350席・中ホール (室内楽中心の音楽専用ホール) 450席
小ホール (平土間形式約200席)・リハーサル室・練習室2室・駐車場	約450台管理・運営 名取市文化振興財団

表-3 調査対象公演概要

NO.	公演内容	ジャンル	日時	開演	ホール	鑑賞者数	占席率 (%)	有効回答	有効回答率 (%)
1	ブラハ交響楽団	クラシック	97.10.1(水)	19:00	大	1112	82.4	799	71.9
2	ヨセフ・スーク&仲道郁代	クラシック	97.10.10(土・祝)	14:30	中	308	68.4	211	68.5
3	劇団四季ミュージカル「エビータ」	演劇・ミュージカル	97.10.13(月)	19:00	大	1006	74.5	611	60.7
4	都はるみ	音楽・演歌	97.10.18(土)	14:00	大	1228	91.0	306	24.9
5	米良美一&佐藤淳一	クラシック・声楽	97.10.24(金)	19:00	中	421	93.6	293	69.6
6	吉林省京劇団	演劇・舞踊	97.11.16(日)	14:00	大	559	41.4	345	61.7
7	ブラームスのタペ	クラシック	97.11.29(土)	19:00	中	192	42.7	109	56.8
8	チェンバロからピアノ	クラシック	97.12.13(土)	14:00	中	98	21.8	55	56.1
9	前田憲男&仙フィル	クラシック	97.12.21(日)	14:00	大	495	36.7	337	68.1
10	「童謡百年史」(ボニージャックス)	音楽・童謡	98.1.25(日)	14:00	大	715	53.0	298	41.7
11	古墳からのメッセージ(コンサート)	音楽・ポップス	98.2.14(土)	14:00	大	408	30.2	229	56.1
12	八島博人(バイオリンリサイタル)	クラシック	98.2.28(土)	14:00	中	118	26.2	51	43.2
13	春日成子(メゾソプラノ)	クラシック・声楽	98.3.11(水)	19:00	中	89	19.8	47	52.8
14	柳家小さん一門会	落語	98.3.14(土)	14:00	大	533	39.5	307	57.6
15	中島みゆき	音楽・ポップス	98.3.23(月)	19:00	大	1225	90.7	215	17.6
16	国立劇場3月歌舞伎	演劇・歌舞伎	98.3.25(水)	18:00	大	550	40.7	287	52.2
17	国立劇場3月歌舞伎	演劇・歌舞伎	98.3.26(木)	13:00	大	720	53.3	290	40.3
18	国立劇場3月歌舞伎	演劇・歌舞伎	98.3.26(木)	18:00	大	502	37.2	353	70.3
19	渡辺一世(トーク&ライブ)	音楽・ジャズ	98.3.28(土)	14:00	中	133	29.6	77	57.9
合計(人数)/全体平均 (%)						10412	53.8	5220	50.1

表-2 N会館周辺の居住人口

自治体	人口 (千人)
名取市	65
太白区	215
青葉区	261
若林区	126
泉区	197
宮城野区	173
塩竈市+多賀城市	122
岩沼市+亘理町+柴田町	115

、演芸・演劇(69.8%))と同傾向を示した。また、図-2では、クラシック公演が各年齢層を通じて鑑賞者が存在することを示している。

年齢は、45歳以上で63%、65歳以上で15%を占めている。ジャンル別では、童謡、演歌、歌舞伎、落語では45-64歳の層が中心で、演歌、落語では65歳以上が30%以上を占める。他方、クラシック、ポップス(No.15)では0-34歳の若年層が40%程度で、特に室内楽(No.5, No.8)では、0-34歳で50%近くとなっている。社会調査での最多層は、クラシック45-54歳(21%)、ポップス15-24歳(24%)、演芸・演劇45-54歳(21%)で、本調査の年齢の最多層との位置とはほぼ同傾向だが、クラシックで低く、演芸・演劇で若干高くなっている。

属性では、主婦が33%を占め、その中心は45～54歳(鑑賞者全体の10%)となっている。公演別では、歌舞伎、童謡で主婦の占める割合が大きい。クラシックでは主婦が30%前後である一方、会社員、公務員、教育関係等も合わせて30～40%程度を占めている。

居住地(注-11)は、全体平均で名取市52%、仙台市32%(南部22%、北部他10%)であり、隣接する大都市の影響が伺える。演目により構成が異なっているが、特にクラシックの中ホールの公演(No.2,5,7,8,12,13)では、仙台市居住者が40%に達している。ポップス(No.15)、演歌、歌舞伎等の大ホールの公演では、名取市居住者の比率が45～50%になると同時に県外からも一定数の鑑賞者がみられる。

公演毎の鑑賞者の一年間の平均年間ホール利用日数(注-12)をみると、全体では6.1日であるが、中ホールの室内楽の公演(No.2,7,8)では、8.6～9.9日である。これから、公演内容が専門化した場合に利用頻度が高い鑑賞者の割合が増えることが伺える。

5. 公演別の居住地特性 (表-4 図-3,4,5,6)

次に、公演別の居住地特性をみる。各公演を占席率と全体に占める名取市居住者率の2軸で整理し、更に各公演を4つのType(A～D)に分類したのが図-3である。開館記念公演のNo.1(Type C)以外に、占席率、名取市居住者率が共に高い公演がないこと。占席率の高い公演では、地元以外の鑑賞者が重要なことがわかる。逆に占席率の低いType A, Bでは、クラシック公演(No.7,8,9,11,12,13)が殆どを占めるType Bと、その他の公演(No.6,10,14,19)が多いType Aにわか

表-4 各公演毎の鑑賞者層の構成 単位: % (有効回答: (性別)5219, (年齢)5137, (属性)5024, (居住地)5079)

		No.1	No.9	No.2	No.7	No.8	No.12	No.5	No.13	No.10	No.11	No.15	No.19	No.4	No.16	No.17	No.18	No.6	No.3	No.14		
		クラシック (大)	クラシック (大)	クラシック (中)	クラシック (中)	クラシック (中)	クラシック (中)	クラシック (中) 声楽	クラシック (中) 声楽	音楽・童謡 (大)	音楽・ガブズ (大)	音楽・ガブズ (大)	音楽・ジャズ (中)	演歌 (大)	歌舞伎 (大)	歌舞伎 (大)	歌舞伎 (大)	演劇・舞踊 (大)	演劇・ミュージカル (大)	落語 (大)	全体平均	全体総数 (人)
性別	男	37	30	37	26	19	28	14	9	26	33	44	22	22	23	20	19	27	16	44	26	1378
	女	63	70	63	74	81	72	86	91	74	67	56	78	78	77	80	81	73	84	56	74	3841
年齢	0-14	3	3	4	5	11	6	14	11	4	2	2	8	0	0	3	1	4	1	1	3	164
	15-24	8	2	10	13	18	4	19	24	1	4	13	7	0	6	3	7	5	18	2	8	410
	25-34	10	6	23	8	20	14	14	11	3	10	30	14	1	9	2	6	10	34	6	12	636
	35-44	16	12	16	9	25	24	23	7	14	8	39	24	5	7	6	8	11	21	7	14	723
	45-54	30	33	22	28	15	20	20	22	31	30	13	21	23	26	19	27	20	17	21	24	1225
	55-64	23	30	20	25	7	14	8	20	31	30	4	14	39	29	30	26	23	7	31	23	1169
	65-	10	14	6	12	4	20	2	7	16	17	0	12	31	22	36	24	28	3	33	16	810
属性	会社員	20	24	22	23	16	18	15	20	20	16	37	17	17	22	9	17	17	30	20	21	1040
	公務員	13	12	14	4	8	10	10	4	5	10	10	11	3	9	3	6	8	26	8	11	548
	教育関係	8	4	10	5	14	6	6	7	4	2	3	1	0	3	2	3	5	7	2	5	241
	自営業他	9	8	9	11	2	12	4	0	7	8	8	3	15	9	8	11	8	2	12	8	402
	主婦	30	37	20	31	33	33	32	18	46	37	22	47	46	37	49	39	33	17	33	33	1658
	学生他	5	2	6	7	16	2	11	24	0	3	8	5	0	4	2	6	3	7	1	5	231
	無職	4	5	6	7	2	6	2	7	10	15	2	7	15	9	16	10	15	2	16	8	402
居住地	その他	10	9	14	13	10	14	20	20	8	9	11	9	4	9	9	7	10	9	9	10	502
	名取市	64	52	36	50	42	37	39	30	75	46	49	83	50	43	46	48	66	32	68	52	2623
	仙台市南部	17	21	28	21	26	31	22	28	12	32	18	7	13	30	24	27	14	29	17	22	1091
	仙台市北部+塩・多	7	13	19	17	8	24	15	9	6	8	6	4	5	9	16	8	4	17	4	10	508
	岩・亘・柴	6	8	4	5	6	4	17	20	4	12	11	4	20	13	5	10	10	11	6	9	469
平均年間ホール利用日数 (月)	その他	6	6	13	7	19	4	8	13	3	2	16	3	12	5	10	8	6	11	4	8	388
		5.3	6.5	9.6	8.6	9.9	8.5	7.0	6.7	5.8	6.6	4.7	8.6	4.4	6.4	5.6	5.6	5.5	5.1	6.6	6	

れており、ジャンルによる鑑賞者の居住地の違いがわかる。

次に同ジャンル、同地域に固定したうえで年齢層と占席率の関係についてみる。図-4に中ホールのクラシック公演(No.2,5,7,8,12,13,19)の占席率と名取市居住者率の変化を比べてみると、占席率が高くなるに従って、65歳未満の層はほぼ増加するのに対して、65歳以上は増加せず横ばいである。また、各層の平均年間ホール利用日数は、0～64歳は6.8～7.4日だが、65歳以上は10.1日と一段と高いことがわかった。つまり、クラシックの鑑賞者層は利用頻度の高い固定的な高齢者層とその他の流動的な若年・中年層が存在していることがわかる。

次に地域別の鑑賞者数の違いをみる。図-5に大ホール(1350席)と中ホール(450席)の席数差を考慮した地域別鑑賞者率(注-13 以下鑑賞者率)の名取市と仙台市全体を示す。名取市の鑑賞者率は0.08～8.08(1千人)と約100倍の変動があるが、仙台市ではほぼ0.03～0.3(1千人)

図-3 名取市居住者と占席率(数字は公演番号(表-3))

図-4 クラシック(中ホール)公演での名取市居住者にみる年齢別の鑑賞者数の変化(数字は公演番号(表-3))

図-5 名取市と仙台市の地域別鑑賞者率 (ノ千人) (数字は公演番号 (表-3))

図-6 名取市・太白と岩・亘・柴の地域別鑑賞者率 (ノ千人) (数字は公演番号 (表-3))

人)の間の値となっている。占席率が高いTypeD(2,3,4,5,15)でも公演によって、仙台市と名取市の鑑賞率に違いがある。また、仙台市の鑑賞率の高いNo2,3,5は、詳細な分析で仙台市南部の特に会社員等層が何れも公演全体の12~18%と他に比べて多く、この層の増減が仙台市全体の鑑賞者数の増減の重要な要因であることが推察される。

図-6は、名取市に隣接する太白、岩・亘・柴両地域の鑑賞者率を示したものである。全般的に岩・亘・柴が、太白の鑑賞者率を上回っている公演が多い。両地域の人口規模は1:2であることを考えると、鑑賞者数としても岩・亘・柴が上回る公演がある。また、名取市の鑑賞者率が増加すると岩・亘・柴も増加する傾向にある(全体で相関係数0.54)。これらは、両地域の居住者の鑑賞傾向が類似していること、このホールが、岩・柴・亘地域の通勤・通学者層が大都市へ移動する際の軸線上に立地していることなどが要因として考えられる。

6. 来館手段と来館所要時間の変化 (表-5,6 図-7,8)

次に来館手段からみた時間面での圏域をみる。表-5,6は、ホールへの来館手段を居住地、属性、年齢等で分類したものである。自動車利用(62%)、自動車送迎(9%)を合わせると全体の71%が自動車で来館している。名取市居住者だけをみても送迎を含む自動車利用は同様に71%である。JR等の公共交通機関の利用をみると比較的近い仙台市南部、岩・柴・亘地域では10~12%、遠距離のその他でも22%となっている。また、その他に含めたバスやタクシーは2%程度である。居住地に関わりなく自動車の利用率が高いことがわかる。自動車利用率は、会社員等、自営業等では、75~90%(送迎含む)と高いが、学生等(40~60%)、近距離の名取市主婦(67%)、遠距離のその他の主婦(55%)などでは若干低く、自動車所有率との関係が伺える。年齢別では、自動車利用の中心は25-64歳層である。65歳以上では徒歩での来館が16%と高く、高齢者にとっては徒歩圏内でのホールの存在が普段のホール利用を誘発していることが伺える。

次に、全鑑賞者の来館所要時間を手段別に5分間隔の累積度数で示したのが図-7である。全体で累積度数60%を超えるのが30-35分、80

%で60-65分となっている。自動車(送迎含む)では60%を超えるのが20-25分(約10Km)、80%で40-45分(約20Km)である。徒歩では、60%を超えるのが15-20分(約1.4km)、JR+徒歩は50-55分となった。図-8は、各公演毎の来館所要時間である。その分布をみると、各公演の鑑賞者全員の60%圏は15~40分に内包されている。前述の森田の研究(文-5)では、公共交通機関の利用が基本となる条件下で60%需要圏域を30~60分としているが、自動車での利用が主となる場合の60%圏域は、それより少し小さく最大で40分以内の圏域となっている。

7. 主体条件とホール利用の関連 (表7,8、図-9,10,11)

前章では、ホールへのアクセスと鑑賞者の関係を明らかにした。しかし、実際のホール選択においては施設単体へのアクセスだけでなく、他ホールと比較しつつホールを選択されていると思われる。そうした経過を把握することはなかなか難しいが、普段ホールをよく利用する層は、そうした志向が明確で捉えやすく、実際の鑑賞者数を想定する上でも大きな位置を占めている(注-14)。そこで、No.3以降の鑑賞者

表-5 居住地別・来館手段と主要属性 単位:% (総数 4753)

		属性						割合	人数
		会社員等	自営業等	主婦	学生等	無職	その他		
全体	自動車	72	70	55	45	51	66	62	2965
	自動車送迎	4	12	13	10	12	8	9	430
	徒歩	7	7	11	5	17	7	9	432
	JR+徒歩	9	3	6	21	6	7	8	366
	その他	8	8	14	19	14	13	12	560
名取市	自動車	70	68	53	64	50	70	61	1560
	徒歩	5	12	14	8	11	8	10	256
	JR+徒歩	15	11	17	13	25	9	16	403
	その他	2	2	1	5	2	1	2	41
仙台市南部	自動車(送迎含)	9	7	14	10	13	13	11	288
	徒歩	78	90	68	58	68	76	73	779
	JR+徒歩	12	2	13	20	11	4	12	130
	その他	10	8	19	22	21	19	14	153
仙台市北部	自動車(送迎含)	75	89	73	41	46	57	70	347
	徒歩	17	0	13	7	46	26	17	84
	JR+徒歩	8	11	14	52	8	17	13	65
	その他	8	11	14	52	8	17	13	65
岩・柴・亘	自動車(送迎含)	84	91	83	60	88	69	82	368
	徒歩	8	3	8	40	0	25	10	43
	JR+徒歩	8	6	9	0	12	5	8	36
	その他	8	6	9	0	12	5	8	36
その他	自動車(送迎含)	67	74	55	42	62	63	62	233
	徒歩	23	9	18	50	10	17	22	83
	JR+徒歩	10	18	27	8	29	21	16	59
	その他	10	18	27	8	29	21	16	59

表-6 来館手段・年齢層 単位:% (総数 4907)

	0-14	15-24	25-34	35-44	45-54	55-64	65-
自動車(送迎含)	77	61	71	79	77	71	63
徒歩	4	6	5	6	8	11	16
JR+徒歩	9	22	14	6	5	5	6
その他	11	11	10	9	10	13	15

図-7 来館手段別・来館所要時間

図-8 鑑賞者の来館所要時間 (各公演毎)

の中から、名取市に居住し月1回以上ホールで鑑賞を行っている
と回答した409名を対象に、過去1年間N会館周辺の主要なホール(図-
2)の利用の有無を基本データとした主成分分析(注-15)を行い、軸
の名称付けと解釈を行った(表-8,図-9)。さらに、クラスター分析(群
平均法)により、融合距離0.5で11のTypeに分類した。

Typeの分類の概要は、表-7に示す。Type1,2,3はN会館の利用を中
心に限定したホールを利用する。Type3はクラシック鑑賞の志向がや
や強い。Type4は、近隣の名取・岩沼のホールを中心に利用している。
Type5は、仙台市内の自主事業のホールの利用が目立ち、Type6,7,8
は仙台市内中心部の貸し館型の大ホールを主軸に利用している。
Type9はN会館、IKを中心に幅広く仙台市中心部、近隣ホールを利用
しており、Type10,11はより広域に様々なホールを利用している。

次に各Typeにおける鑑賞者の大半を占める主婦層と会社員等層で
利用傾向の相違をみる。主婦層は、Type 6,Type7(7-1),Type9等で多く
仙台市中心部の大ホールを志向する共通な特徴が見られるが、会社
員等層は、Type4、Type7(7-2)等で多いものの、各Typeに分散してお
り多様な利用傾向の層が存在している。会社員等層をより詳細にみ
ると、中高年層でIK、若年層でLHがTypeの分類の軸になっている。
これは、コミュニティ志向の強いIKが中高年層に支持されているこ
と、独自の自主事業が主体で現代的な催事が多いLHが若年層に支持
されていると考えられる。一般的に活動圏域が固定化(注-16)されやす
い主婦層は、鑑賞主体としての共通の利用傾向がみられ、他方、会
社員等層では幾つかの分類の軸が成立するものの、多様な利用パター
ンがみられる。また、各Type毎の過去一年間における催事の鑑賞状
況をみると、クラシックは全般的に鑑賞経験が多く見られるが、演
劇やポップス等は各Type毎で鑑賞傾向に違いが見られる。

更に詳しくみるために、表-7の対象者の中から主婦(147名)と
会社員等(118名)をそれぞれ抽出し、同データのホール利用経験に
ついて主成分分析を行った。(図-10,11 各軸の名称及び解釈は表-8)

主婦層(図-10)は、仙台市内の貸し館主体の大ホール、近隣の自治体
のホールの2つの群が形成されている。他方、会社員等層(図-11)は、
仙台市内の自主事業中心のホール、貸し館主体の大ホール、近隣の
自治体のホールの3つの群が形成されている。また、主婦層では、N
会館のみ利用する層と利用しない層が存在しているのに対し、会社
員等層では、N会館は、近隣の自治体のホールと同様の群に内包さ
れ、居住地域に立地しているホールでありながら近隣のホールと同

表-7 利用傾向の分類(群平均法 融合距離0.5を軸に分類 総数409)

各Typeの概要					クラスターの主体条件(%)				一人あたりの過去一年間の参加催事(%)						
Typeの種類	人数	利用数	ホール利用傾向		女性	会社員等	主婦等	平均年齢(歳)	クラシック	ポップス	舞踊	演劇	民謡・歌謡	演芸・落語	
Type 1	1-1	44	1	NK	66	25	34	49.7	66	32	16	30	23	11	
	1-2	12	2	NK+IK	42	25	33	48.3	42	25	25	8	0	0	
	2-1	6	2	NK+LH	67	17	0	41.2	33	33	17	33	17	17	
Type 2	2-2	37	2	NK+(MK,SK,IH,DH,SK)	70	30	35	54.2	57	41	14	41	32	24	
	3-1	42	3	NK+IH+1,NK+MK+1,NK+DH+1	76	31	40	54.9	71	33	26	48	24	12	
Type 3	4-1	9	3	NK+IK+1	67	67	11	55.1	56	33	0	33	33	11	
	4-2	17	4	NK+IK+2	82	29	35	57.1	41	65	29	41	35	6	
Type 4	5-1	23	3~4	NK+LH+1,NK+IH+SK,NK+LH+2	77	39	39	49.0	57	39	17	35	13	9	
	5-2	32	4	NK+IH+MK+1	77	28	41	56.4	63	47	25	53	31	19	
Type 5	6-1	16	4	NK+MK+SK+DH	94	13	56	60.8	31	13	44	25	56	25	
	6-2	13	5	NK+MK+SK+DH+SS	75	31	46	51.6	46	23	38	46	46	31	
Type 6	7-1	10	3	NK以外で3ホール	90	30	50	49.5	60	40	20	50	10	10	
	7-2	12	4	NK以外で4ホール	91	58	25	47.0	67	67	25	100	25	0	
Type 7	8-1	30	5	NK+(MK,SK,IH,DH,SSから4つ選択)	84	30	47	55.4	63	40	13	33	10	27	
	8-2	17	6	NK+MK+SK+IH+DH+SS	90	6	24	57.1	76	35	41	41	29	41	
Type 8	9-1	14	7~8	NK+IK+5~6	69	21	50	55.8	50	7	7	50	50	21	
Type 9	10-1	42	2~7	TK,SG,SH+0~5	73	24	33	49.9	69	29	33	50	19	36	
Type 10	11-1	33	4~11	SK+MK+DH+(BS,LH,SS)+0~7	70	33	24	48.9	67	55	30	67	30	33	
全体		409			75	29	36	52.7	60	37	24	44	26	20

図-9 主成分分析の結果とTypeの分布

表-8 図-9,10,11の軸名称及び意味

軸	軸名称	軸の意味
図-9	1軸 利用ホール数	利用ホール数が多い(+)・少ない(-)
図-9	2軸 立地性	利用ホールの立地が郊外向(+)・大都市中心部志向(-)
図-10	1軸 利用傾向の共通性	母体となる鑑賞者層に共通して利用される(+)・特定の層に利用される(-)
図-10	2軸 立地性	郊外型(+)・大都市中心型(-)
図-11	1軸 利用傾向の共通性	母体となる鑑賞者層に共通して利用される(+)・特定の層に利用される(-)
図-11	2軸 立地性	大都市中心型(+)・郊外型(-)

図-10 月1回以上利用の名取市居住の主婦層

図-11 月1回以上利用の名取市居住の会社員等層

様な利用傾向にあることが伺える。

つまり、主婦層では、大ホール志向という層全体の共通した傾向がみられ、他方、会社員等層は、自主事業等の演目内容でホールを明確に区分する傾向にある。また、大都市郊外では、居住地が同じでも属性の違いにより、そのホールの位置づけが異なることがわかる。

8. まとめ

本稿は特定のホールでの鑑賞者の調査研究であるが、大都市近郊に立地するホールの利用圏域とその形成要因が明らかになった。以下にその概要と今後のホールの地域計画上の知見を記す。

8.1 鑑賞者の居住地特性

隣接する大都市の影響を受けるためか、占席率が高く地元の居住者の割合が高い公演は成立しにくい側面が見られた。クラシックの室内楽等の専門性の高い公演では、若年層や普段のホール利用頻度が高い鑑賞者が集まる傾向にある。また、鑑賞者層は、固定的な高齢者層と流動的な若年、中年層から構成されやすい。大都市からの鑑賞者数の変化は、特にホールの近隣に居住している会社員等層の増減が主要因となっている。同時に、ホールが周辺市町村から大都市への昼間人口移動の軸線上に立地している場合、周辺地域の鑑賞者率は地元の鑑賞者率の増減と同様の傾向を示すことがわかる。

8.2 利用圏域

本事例では、居住地に関わらず鑑賞者の約70%が自動車により来館していた。自動車での来館を主とした場合、時間距離でホールを中心とする約40分圏で鑑賞者の約60%、60分圏でほぼ全体の来館起点が内包されることがわかった。また、高齢者層では徒歩圏内、主婦層でも日常生活圏内のホールを利用する傾向がみられた。鑑賞者全体の来館起点は公演の内容に関わらずほぼ一定で、その60%圏は15分～40分の範囲に内包され、公演種別に関わらずある程度の利用圏域予測の可能性は示唆される。しかし、その細部の圏域確定は、鑑賞者の属性や催事特性によって細く変化しており、詳細な検討を必要とする。

8.3 鑑賞者数の想定

同一地域に居住し、普段の利用頻度が高くて生活環境の違いによりホール利用傾向が異なることが把握できた。本稿で、普段のホール利用頻度の高い層を抽出、分析した結果では、各公演の鑑賞者において、割合の高い主婦層では大都市中心部の大ホールを利用するパターンに収斂するのに比べ、同様に主要な層である会社員等層では多様な利用パターンを示していた。つまりホール立地地域において、主婦層は多数の鑑賞者が見込める一方で、隣接の大都市のホールの公演の影響を受けやすいこと。会社員層では一定の鑑賞需要は存在するものの多様な利用形態を示し、共通の利用傾向にはなりにくいことが伺える。鑑賞者数の想定においては、個人の志向性と地域の居住人口だけではなく主体条件に基づく利用傾向にも留意する必要がある。

謝辞 本調査研究の実施に関して、名取市文化振興財団の関係者の皆様に、データ入力、集計作業に関しては、岩下明久君（現（株）熊谷組）、檜山智子君（現（株）三菱地所ホーム）の御協力を頂き、この場を借りて深く感謝致します。

注

- 1) 清水、小野田らの文-1) では、全国のホール数は1988年1549施設1921ホールから、1996年で2395施設2883ホールに増加したとしている。
- 2) 文-1) でも80年代後半から地方都市で整備が進展したとしている。
- 3) 荒井は文-2) で自動車所有率の違いにより活動圏域に違いがあるとしている。
- 4) 一般にホールにおいて鑑賞する人を利用者又は鑑賞者としている。本稿では舞台芸術を鑑賞する立場から鑑賞者とする。

- 5) 小野田は、文-6) で民間ホールを含む幅広い概念で「文化ホール」を定義している。本稿では、調査対象、自主事業という演目の性格から公共ホールとした。本稿では、公共ホールを国、自治体が公共の利用に供する施設で直営または、財団法人等により運営し、舞台芸術の上演を意図したものから多目的な集会のための施設までを含むとする。
- 6) 平成7年度の国勢調査では、名取市の通勤・通学者の内53.9%が他の市町村で従事。人口全体の約30%にあたり、特に隣接する太白区の影響が大きい。
- 7) 今回の調査期間内に、有料の自主事業公演19と無料の自主事業公演1が開催されている。本稿では、有料と無料の場合とでは、その行動内容・鑑賞者層に大きな相違が生じると思われたので、無料公演を分析結果からは除外した。
- 8) 本稿では、各公演の入場者全てを鑑賞者とする。また、各公演毎に調査票の配付・回収を行っている為同一人でも別公演に来場した場合は別人となる。これは、調査上の問題もあるが公演毎の鑑賞者層を明確にするためである。
- 9) 本調査では、調査遂行上約10分程度の記入及び回収という調査のため、何らかの項目に回答されたもの5220を有効回答と位置づけた。また、複数の調査項目間の関係を分析する際は、両項目を回答したものを有効回答とした。
- 10) 平成8年度の社会生活基本調査の「クラシック音楽鑑賞」、「ポピュラー音楽・歌謡曲鑑賞」、「演芸・演劇・舞踊鑑賞」の統計上有効な全国のデータを参照。
- 11) 周辺地域の特性を考慮し、仙台市南部（太白区、青葉区、若林区）、仙台市北部（泉区、宮城野区）、塩・多（塩釜市、多賀城市）岩・亘・柴（岩沼市、亘町、柴田町）と分類した。
- 12) 調査項目を週一回→51日、月1-2回→18日、2-3ヶ月1回→5日、半年1回→2日、年1回→1日として各公演毎の平均利用日数を算出。
- 13) 居住人口千人あたりの、想定鑑賞者数。（各公演が1000人のホールで行われた場合を想定）地域別鑑賞率＝（自治体毎の各公演の実際の鑑賞者）/（各自治体の居住人口）×α（α：中ホール公演＝2.22 大ホール公演＝0.74）
- 14) 文-12) の調査では、月1回以上ホールに行く層は年1回以上ホールに行く層の約8%程度だが、利用回数に換算すると年12回で同規模の鑑賞層形成する。
- 15) 各主成分の固有値ベクトル及び寄与率は、表-10,11に示す。

表-9 図-9の固有値ベクトルと寄与率 表-10 図-10,11の固有値ベクトルと寄与率

主成分	固有値	寄与率	累積寄与率	主成分	固有値	寄与率	累積寄与率
図-10 1軸	2.6	0.17	0.17	図-10 1軸	3.45	0.27	0.27
2軸	1.51	0.1	0.27	2軸	1.86	0.14	0.41
図-11 1軸	2.96	0.23	0.23	図-11 1軸	2.96	0.23	0.23
2軸	1.48	0.11	0.34	2軸	1.48	0.11	0.34

- 16) 主婦の日常の活動圏域の固定化・小ささについては、近年の時間地理学の分野で幾つかの点が実証されている。具体的には、社会的な制約条件(育児、家事、移動手段)が固定化・小ささを形成する小さくする主要因であるとされている。日常生活の詳細は文-2) が詳しい。

引用文献

- 1) 清水裕之、小野田泰明他 平成8年度科学研究費補助金研究成果報告書「ミクロ統計データを活用とした舞台芸術施設運営に関する調査研究」1997.3
- 2) 荒井良雄他「都市の空間と時間-生活活動の時間地理学-」古今書院 1996
- 3) 柏原士郎「地域施設計画論-立地モデルの手法と応用-」鹿島出版会 1991
- 4) 森田孝夫「ホール立地と公演の種類が需要の年齢需要圏に与える影響-市民ホールの需要圏に関する研究その1-」日本建築学会論文報告集 No.284 pp93-99 1979.10
- 5) 森田孝夫「立地から推定される需要関数を用いた市民ホールの配置計画」-市民ホールの需要圏に関する研究その2- 日本建築学会論文報告集 No.288 pp149-155 1980.2
- 6) 小野田泰明、松本啓俊、菅野實「市町村域における文化ホール整備に関する研究-文化ホールの地域的整備に関する研究その1-」日本建築学会計画系論文報告集 No.443 pp59-69 1993.1
- 7) 小野田泰明、松本啓俊、菅野實「ホールにおける催事ジャンルの構成からみた文化ホール類型-地域的整備に関する研究(その2)-」日本建築学会計画系論文報告集 No.472 pp83-92 1995.6
- 8) 清水裕之「劇場の構図」鹿島出版会 1985
- 9) 本杉省三他「劇場・ホールにおける観客サービス機能利用に関する調査研究1～3」日本建築学会大会学術講演梗概集E pp755-760 1998.11
- 10) 船越徹、積田洋、浦部智義「視角特性から見たコンサートホールの評価と座席配置に関する研究-劇場・ホールの空間特性に関する研究(その1)-」日本建築学会計画系論文報告集 No.513 pp125-133 1998.11
- 11) 浦部智義、船越徹、積田洋「コンサートホールの座席における視覚的評価とその物理的要因の相関に関する研究-劇場ホールの空間特性に関する研究(その2)-」日本建築学会計画系論文報告集 No.524 pp151-158 1999.10
- 12) 総務庁統計局「平成8年度社会生活基本調査報告」1998.7
- 13) 小野田泰明、菅野實、松本啓俊「新設ホールによる都市内文化ホールの利用化-仙台市における事例的考察-」日本建築学会計画系論文報告集 No.491 pp83-90 1997.1

(2000年5月10日原稿受理、2000年10月16日採用決定)